

## 5 歯肉炎予防の取り組みによる3カ月間の効果 —新潟市立M小学校3年生の総合学習への支援—

計良倫子, 木暮ミカ<sup>1</sup>, 本間和代

明倫短期大学 歯科衛生士学科, <sup>1</sup>歯科技工士学科

keywords : 小学校3年生, 総合学習, 歯肉炎予防

### はじめに

本学は平成16年より, 新潟市立M小学校の全校児童を対象に, 毎年歯科保健指導を実施してきた。この度, 小学校側が3年生の総合学習として「歯の健康についての調べ学習」をテーマに, 歯や口の中の関心を高め, 児童自身が歯や歯肉の健康の大切さを知る取り組みを企画した。我々は, まず, 児童が本学を見学し, 歯科医療従事者の職業を理解する取り組みを支援し, 次に, 学習前(5月)・学習後(9月)の児童の口腔内写真撮影およびプロービングを実施して, 歯肉およびプラーク付着状況の変化をまとめ, 総合学習の資料として提供した。また, その健診データをもとに保護者には講演を, 児童全体へは歯みがき指導を行い, 家庭における親子共通のテーマとして, 歯や歯肉の健康維持を目指した。これらの支援から, 今回は, 学習前後の歯肉およびプラーク付着状況の健診結果について分析を試みたので報告する。

### 対象および方法

対象: 新潟市立M小学校3年生57名(男子28名, 女子29名)を対象とした。

方法: 平成24年5月および9月の2回, 上下顎前歯部唇面の口腔内写真撮影およびプロービングを実施した。口腔内写真からは, 歯肉炎症が認められた部位およびプラーク付着状況の判定を行った。歯肉炎症の判定は, 上下顎各々の炎症部位数の合計を固定値とし, プラークは, 付着なし(0)~歯面全体に付着(3)の4段階で判定を行い, 上下顎各々の対象歯中の最大値を固定値とした。プロービングは各歯牙の近心を測定し, 上下顎各々の対象歯中の最大値を固定値とした。

### 結果および考察

#### 1. プラーク付着状況

学習前にプラーク付着度の高いレベル2の者は上顎が16人(28%), 下顎が11人(19%), 学習後は上顎が8人(14%), 下顎が2人(4%)だった。下顎において大幅な減少が見られたことは, ブラッシング指導の効果によるものと考えられる。

#### 2. 歯肉有所見の現状

学習前の上顎歯肉炎症部位数は, 最大が5部位で3人(5%)であったが, 学習後は1人(2%), 下顎炎症部位数は, 最大が5部位で19人(33%)であったが, 学習後は7人(12%)であった。下顎において顕著な差がみられたことは, 歯肉炎の原因であるプラークのコントロールが, ある程度できるようになったためと思われる。

#### 3. 歯周ポケットの現状

学習前, 上顎のプロービング値3mm以上の者は30人(53%)で, 学習後は15人(26%), 下顎では, 学習前が33人(58%)であったが, 学習後は21人(37%)であった。上下顎共に, プロービング値3mm以上の者が学習後に減少したことは, 総合学習の取り組みにより, 歯や歯肉の健康への知識と意識が高まり, 口腔内清掃につながったためと考えられる。

### まとめ

プラーク付着状況, 歯肉有所見部位数およびプロービング値の変化より, 歯や歯肉の健康に対する意識が高まり, 総合学習の結果が認められたと思われる。小学校3年生は歯の交換期であるため, 児童のブラッシング指導は個別に行うことが必要である。また, 今回は僅か3ヶ月間の変化から効果を判定したが, 総合学習終了後においても, 何らかの方法で機会を捉えて支援を継続し, 歯磨き習慣を定着させていくことが望ましいと考える。